

December 10, 2016

名詞修飾構文の対照研究  
平成28年度第3回研究会

寺村秀夫 1999 『寺村秀夫論文集1—日本語文法編—』  
連体修飾の意味とシンタクス—その1—  
—その2—  
—その3—  
—その4—

Masayoshi Shibatani  
Department of Linguistics  
Rice University  
&  
Graduate School of Letters  
Osaka University

本稿の目標は、日本語の連体修飾の構造をシンタクスと意味の両面から分類し特徴づけることである。国語で一般に連体修飾といえは、いわゆる連体詞によるもの、体言プラス連体助詞「ノ」によるものなども含まれるが、本稿で直接の対象としようとするのは、用言、ないし用言を中心として一つの叙述を成り立たせ得るような、つまり文として成り立ち得るような、語のかたまりによる名詞修飾の構文であって、英語のそれらに相当する構文の特徴をも視野に入れつつ、**一般に動詞や形容詞が名詞を修飾するというのはどういうことか**についても考えてみようとするものである。

# いわゆる「連体修飾構造/節/句」と呼ばれているもの認定について

## p. 158 目標とその範囲

よるもの、体言プラス連体助詞「ノ」によるものなども含まれるが、本稿で直接の対象としようとするのは、用言、ないし用言を中心として一つの叙述を成り立たせ得るような、つまり文として成り立ち得るような、語のかたまりによる名詞修飾の構文であって、英語のそれらに相当する構文の特徴をも視野に入

他のページで、

れつつ、**一般に動詞や形容詞が名詞を修飾する**というのはどういうことかについても考えてみようとするものである。

これまで、連体修飾のうち文になり得る形式を具えたもの、すなわち「叙述内容」を含む形式が、名詞を修飾する構文を、「内の関係」「外の関係」に分け、それぞれの構文的、意味的特徴を考察してきた。もう一度それを要約する

以上見てきたところから、連体修飾構造は、まず大きく、

構文的には

意味的には

{ 「内の関係」 ……	「付加的修飾」
{ 「外の関係」 ……	「内容補充的修飾」

という2つの類型に分けられると一応言うことができると思われる。連体修飾

### 内の関係

男がさんまを焼く

→ さんまを焼く 男

### 外の関係

(19) さんまを焼く 匂いがする。

というような文は、それが、

(19)' { (イ) (或る) 匂いがする  
{ (ロ) さんまを焼く

連体修飾構造は、「文」か、「文として成り得る」か？

現代日本語の場合

いわゆる「終止形」と「連体形」が異なる要素「だ」・「な」

[綺麗<sup>な</sup>] 花

「綺麗<sup>な</sup>」は文と成り得るか？

\* あの花は綺麗<sup>な</sup>。

あの花は綺麗<sup>だ</sup>。 \* [綺麗<sup>だ</sup>] 花

日本文法学史上の悲劇1：連体形と終止形の合一

## (連体・終止合一以前の)古典語の連体修飾構造

### 動詞語幹の場合

[流るる]水

\* 水流るる。

\* [流る]水

水流る。

### 形容詞語幹の場合

[強き]人

\* 彼の人強き。

\* [強し]人

彼の人強し。

## 連体修飾構造は、「文sentence」でなく「節/句clause」か？

P. 269

文は、どのような形にせよ、それが他の文の中にとり込まれてその一部として機能するようになったとたんに、すでに‘完全な’文ではなくなる。それを「節」と呼んできたわけであるが、それが、もとの文の独立性をできるだけ保

「文」と「節」の区別については、渡辺実の研究に言及（p.189）

「節」は叙述内容を表示する、「文」はその叙述内容について断定する。

P. 297

これまで、連体修飾のうち文になり得る形式を具えたもの、すなわち「叙述内容」を含む形式が、名詞を修飾する構文を、「内の関係」「外の関係」に分け、それぞれの構文的、意味的特徴を考察してきた。もう一度それを要約する

## 連体修飾構造は「叙述内容」を含むか？

ああ、綺麗だ！（何かが綺麗だ）

[綺麗な]花 [綺麗な]のを買って。

[強き]人 [強き]をくじく

[流るる]水 [水の][流るる]を眺む。

- これらは、「何かが綺麗だ」・「誰かが強い」・「何かが流れている」等を「前提 presupposition」とするが、このようなことを叙述しない。
- N.B. 前提は、名詞(句)による言及においても、成立する。

今日は、友人が誰も訪ねてこなかった。(前提:この話者には友人と呼ぶべき人が  
(何人か)いる)



れつつ、一般に動詞や形容詞が名詞を修飾するというのはどういうことかについても考えてみようとするものである。

以上見てきたところから、連体修飾構造は、まず大きく、

構文的には

意味的には

{ 「内の関係」 ……	「付加的修飾」
{ 「外の関係」 ……	「内容補充的修飾」

という2つの類型に分けられると一応言うことができると思われる。連体修飾

## 内の関係

男がさんまを焼く

→ さんまを焼く 男

## 外の関係

(19) さんまを焼く 匂いがする。

というような文は、それが、

(19)' { (イ) (或る) 匂いがする  
{ (ロ) さんまを焼く

# 寺村の「内の関係」(いわゆる限定修飾)の解釈・理解 p.195-96)

すると、今度は、話し手が、そのような連体修飾構造を組立てようとするプロセス(の一部)を示すということが言えるだろう。つまり、たとえば、

(18) さんまを焼く男の詩を覚えているかい。

というような文を組立てる側の頭の中には、

(18)' { (イ) (或る) 男の詩を覚えているかい。  
(ロ) (或る) 男がさんまを焼く。

のような、2つの文で表されるような2つの叙述内容があり、(ロ)を‘從属的に’ (イ)の中に組入れようとするとき、(イ)(ロ)が共有する名詞「男」を結び目として、(ロ)が

男がさんまを焼く

→さんまを焼く男

と‘転換’し、その過程でもともと「焼く」の補語(この場合は「主格補語」)であった「男が」が、その‘補語—述語’関係を示す助詞「が」を失って(つまり形式的には補語たることを放棄して)被修飾部たる位置に立ったものだ、

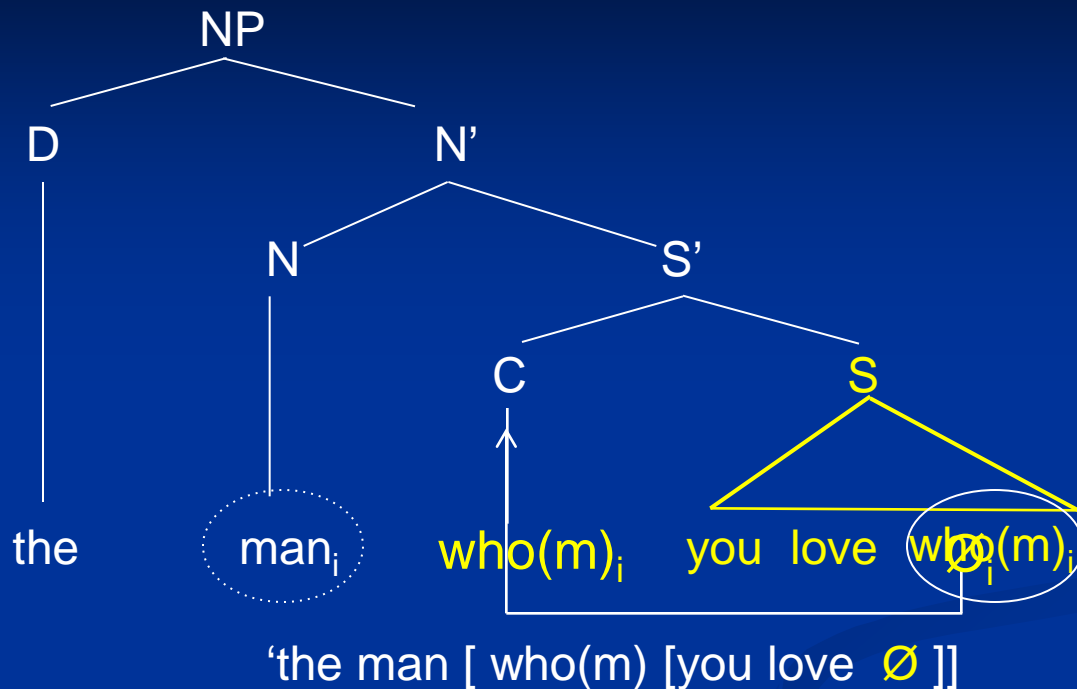
というように記述することができるだろうと思う。内の関係というのは、つまり、もともとは一つの文を構成していた要素が、修飾・被修飾という関係に転じたものである、というようにも言えるだろう。

別のページで、

さて、次はどういう方向に考察を進めるかであるが、内の関係については、先に 2. でも見た先学の研究のように、一文中のどのような補語が抜け出して被修飾語の位置に転じ得るか、ということが分析の視点となるだろう。では外の

## さんまを焼く男（内の関係）

男<sub>i</sub>がさんまを焼く → さんまを焼く男<sub>i</sub>



男<sub>i</sub>がさんまを焼く → さんまを焼く男<sub>i</sub>

これが限定修飾ということなのか？ 以上のような理解では、同定でないか？

僕は、「さんまを焼く男」を知っている = ?

僕は、「さんまを焼く、その男」を知っている

Keenan & Comrie (1977)による限定修飾構造の(意味的)定義

We consider any syntactic object to be an RC if it specifies a set of objects (perhaps a one-member set) in two steps: **a larger set is specified**, called the domain of relativization, and then **restricted to some subset of which a certain sentence, the restricting sentence, is true.** **The domain of relativization is expressed in surface structure by the head NP**, and **the restricting sentence by the restricting clause**, which may look more or less like a surface sentence depending on the language. For example, in the relative clause *the girl (that) John likes* the domain of relativization is the set of girls and the head NP is girl. The restricting sentence is *John likes her* and the restricting clause is *(that) John likes*. (63-64.)

つまり、「さんまを焼く男」の「男」は、寺村の分析にあるような、ある文に起こる特定の「男<sub>i</sub>」でなく、通常の名詞であって「男」一般を指定 (denote) するものである。その名詞の指定の一部(下位範疇)を指定することによって、新しい指定を特定するのが、すなわち限定的修飾ということであって、「内の関係」による修飾構造については、このことが明らかになる分析を施さなければならない。

# 「外の関係」における修飾とは？

## [さんまを焼く]匂い

p.265

まず、内の関係、すなわち、修飾部と底の名詞とが、同一の文を構成し得るような関係を含んで成り立っている連体修飾構文では、修飾節は、底の名詞を‘特定する’、つまり単に他と区別する、という点で‘修飾’しているのに対し、  
外の関係では、修飾部が底の名詞の内容を述べている、あるいはその内容を補充している、という点にその特徴がある。先の例文(2)、(3)と、(4)の違いにもこのことは明らかに認められよう。このような、修飾節が底の名詞を‘修飾’する、ということにおける意味表示機能の相違は、両者のシンタクティックな成立条件の違いを反映していると考えられる。

(19) さんまを焼く匂いがする。

というような文は、それが、

(19)' { (イ) (或る) 匂いがする  
{ (ロ) さんまを焼く

という、2つの叙述内容を含むこと、(18)、(18)'の場合と同じであるが、この関係の場合と異なり、(19)'の(イ)と(ロ)を結びつける共通の名詞、つまり結び目が、この場合にはないわけである。それでは(ロ)は、いったい何を契機として(イ)の「匂い」に結びついたのだろうか。形の上で結びつけるものがないとすると、それは「匂い」という名詞の持つ何らかの意味特性によるものと考えられる。

(ロ)の「叙述内容」が「匂い」の「内容を述べている、あるいはその内容を補充している」(寺村)とはどうことか？

[dannao.tumblr.com/.../私が狂うのは炭火でティーボーンステーキ...](https://dannao.tumblr.com/.../私が狂うのは炭火でティーボーンステーキ...)

Translate this page

私が狂うのは炭火でティーボーンステーキが焼けるのを嗅ぐときだ。



冬になると流石さすがに箱から出されたが朝夕が寒かった。裏山でなにか  
が弾けるような音がした。樹の枝が冷気で折れる音だ。

(遠藤周作「その前日」)

意味的には、内の関係では修飾部は底の名詞を単に特定化するための情報を付加するもので、底の中味については何事も語らない。これに対し、外の関係では、修飾部は底の名詞の中味、内容を語るために存在する。そのことは、たとえば、

(1) 私ガソノ時間イタ音

(2) 樹ノ枝ガ冷気デ折レル音

のような例が示すとおりだ。このことについては3. でくわしく述べた。さら

長い間、うずくまって

のうのうとしている田舎者めら、  
赤い潰滅かいめつの中で

小枝の折れるのを聞くだろう。

アルチュール・ランボー/祖川孝 訳 『ランボーの手紙』

## 「外の関係」の意味

「さんまを焼く匂い」を嗅いだ

「さんまを焼く」という事態と関連する匂い = 匂いを嗅いだ

「小枝の折れる音」を聞いた

「小枝の折れる」という事態と関連する音 = 音を聞いた

つまり、「外の関係」と呼ばれる修飾とは、同格構造であって、修飾部分が主名詞の指定を同定することである。

体言化(準体言を作り出すプロセス)は、**メトニミー**という認知メカニズムを基盤としている

**メトニミー(換喩)**: 概念の隣接性あるいは近接性に基づいて、語句の意味を拡張して用いる、比喩の一種である。

英語で読む**村上春樹** 初めて**ベートーヴェン**を聴く

「年越し沖縄そば」を食する**家庭**も多いけれど、…

(カーリングの)上位3カ国による五輪出場決定戦があり日本本女子の**北海道銀行**はノルウェーを10-4で破り、…

**日本**は1次リーグを2敗1引き分けとして、1次リーグ敗退。

**くじら**あります。(高知市内のレストランで)

# What is nominalization?

It is a **metonymic** process

yielding constructions associated with a denotation comprised of entity (thing-like) concepts that are **metonymically evoked by the nominalization structures** such as events, facts, propositions, and resultant products (“event nominalization”), as well as event participants (“argument nominalization”), or other concepts closely associated with the input forms.

As products,

**Nominalizations (NMLZs) are similar to nouns by virtue of their association with an entity-concept denotation;** they both denote thing-like concepts, which provide a basis for the referential function of an NP headed by these nominals.

「リンゴ」  
↓ denotes



その他

文法的体言化形式（準体言）

「皿の上にあるの（を食べてもいいよ。）」  
↓ evokes



その他

Lexiconに納められている  
名詞類（lexical NMLZsを含  
む）は、ある属性のもと  
に均一的事物を指定概念  
（denotation）として持つ

Grammatical NMLZs（文法的体言化/準  
体言）は、一時的に作られ、準体言構  
造によって喚起されうる様々な事物を  
指定する。

これは、多くのメトニミー表現に見られる  
特性。

メトニミーによって、一つの表現からいくつもの関連する概念が喚起されるが、文脈が適切なものを選ばせる

“the United States”

↓ potentially evokes/denotes



Etc.

Context  
evokes/selects an  
entity-concept  
most relevant

**The United Sates** declared war on Iraq eleven years ago.

**the United States** defeated Japan to avenge last year's loss in the World Cup final and win its fourth gold medal in women's soccer.

Rio de Janeiro, Brazil, July 14, 2013—Brazil defeated **the United States** 3-0 on Sunday at Rio Rio de Janeiro's Maracañazhino gymnasium...

メトニミーは往々にして推移的に(transitively)働く

Team USA players took to social media to share their excitement for representing **the red, white and blue** at the 2014 FIL World Championship ...

**the red, white and blue** →



→ U.S.A.

**スペイン**がヘディングでシュートを決めた。



# Shibatani (2014その他)

## 用言基盤準体言 (Verbal-based NMLZs) のまとめと分類

### 体言化 Nominalization

**語彙的体言化**  
Lexical nominalization  
(名詞を造る)

**文法的体言化 (準体言\*)**  
Grammatical nominalization  
(品詞的には、名詞を造らない)

**事態体言化 (事態/コト名詞)**  
Event nominalization  
e.g. *employ* → *employment*  
遊び、人殺し、お絵かき

**項体言化 (項/モノ名詞)**  
Argument nominalization  
e.g. *employ* →  $\begin{cases} \textit{employer} \\ \textit{employee} \end{cases}$   
人殺し、絵かき、相撲取り  
(お) 使い、召使い、日雇い

**事態体言化 (事態/コト準体言)**  
Event nominalization  
e.g. [that[John employs Bill]]  
[太郎が花子を雇っている]の  
はこういう理由からだ。

**項体言化 (項/モノ準体言)**  
Argument nominalization  
e.g. (Marry) [who [you love  $\emptyset$ ]]  
[ $\emptyset$  花子を雇っている]のは太郎だ。  
[太郎が $\emptyset$  雇っている]のは花子だ。<sup>25</sup>

\* 山田孝雄1908『日本文法論』

準体言(文法的体言化)は、次のようなものを喚起する

## 事態体言化(event nominalizations)

(a) **事態・状況・ことがら**: [母の酔う]のをいつも見てましたから…

(b) **事実**: 雅子は、[夫にそういう女性がいた]のを知っていた。

(c) **時間・場所・理由/原因**:

[雅子が福岡に飛んでいった]のが四月の十二日、[御岳で縊死を遂げた]のが、  
わずか二ヶ月後の六月十日だからね。

[私が生まれ育った]のは埼玉—その田舎町にある借家だった。

[歩調が速い]のは感情的になっているからだろう。

(d) **事態参加者(event participants)**: (いわゆる主部内在型関係節)

ほら、[先生が以前、**金魚の絵**を描いた]のがあるでしょう？

[滑りの悪い引き戸が**音**をたてる]のをきいて、…

(e) **事態の結果** (主部内在型関係節の分析では不十分なもの)

[祖母の飼っていた十姉妹のさえずる]のが聞こえてくる。

[母が一個の生卵に濃い目に醤油を入れた]のを分けてくれる。

緒方は笑って[シューマイに黄色い芥子をたっぷり塗った]のを、勢いよく

口の中に放り込んだ。

## 項体言化(argument nominalizations)

### 主語準体言(subject nominalization)

[**∅** アイスクリームをフランスに持ち込んだ]のは、  
カトリーヌ・ド・メディチだとももの本で読んだ覚えがある。

### 目的語準体言(object nominalization)

[須美子がお土産に **∅** 買ってきた]のを食べて、旨かった記憶があるので、

項体言化には、主語・目的語等文法項の位置に**必須の空所(∅)**がある。

事態体言化におこる空所は、埋めることができる。

[ **私が** 端っこや尻っぽを喜ぶ]のは被虐趣味があるのはいかと友人にからかわれたが、...

長い間、うずくまって

のうのうとしている田舎者めら、  
赤い潰滅かいめつの中で

小枝の折れるのを聞くだろう。

アルチュール・ランボー/祖川孝 訳 『ランボーの手紙』

# 事態準体言 (event NMLZs) の二大用法\*

**名詞句用法/指示機能** (ここでは、ある事実)

[太郎が結婚していた]のを知ってるか？

Did you know [that [Taro had been married]]?

[太郎が結婚していた]

[that [Taro had been married]]

**修飾用法/(同格)同定機能:**

いわゆる外の関係による修飾

[太郎が結婚していた]事実を誰も知らなかった。

No one knew the fact [that [John had been married]]

(\*他の重要な用法として、助詞などを伴った副詞用法がある。E.g. [太郎が結婚していた]ので、次郎と結婚した。)

# 中古日本語準体言の二大用法

男も、女も、[わかきよげなる]が、いとくろき衣を着たるこそ  
あはれなれ。(枕草子・119)

構造

用法  
名詞句用法

[[Ø (わかき)きよげなる]<sub>NMLZ</sub>]<sub>NP</sub> が...

[Ø (わかき)きよげなる]<sub>NMLZ</sub>

修飾用法 (いわゆる内の関係による修飾)

[[Ø (わかき)きよげなる]<sub>NMLZ</sub> [男]<sub>N</sub>]<sub>NP</sub>

細太刀に平緒つけて、[きよげなる]男の持てわたるも  
なまめかし。(枕草子・91)

いわゆる「連体修飾節・関係節」とは準体言の修飾用法に他ならない。  
準体言が修飾用法をとっても、それが「関係節」という別構造に  
なるわけではない。

## 山田孝雄『日本文法論』

1461頁

述語の形を連体形にして付属句たらしむるものは二用のようほうあり、一はそのまま体言に準ぜらるゝものなり。

夏の蟬の春秋を知らぬもおあるぞかし。  
たゞ浪の白きぞみゆる。

かくのものを準体句と称すべし。

二、それより直ちに体言につらねて連体語たる資格に立たしむるものなり。

雪いと白うおける朝やりみずより煙のたつこそをかしけれ。

1462ページ

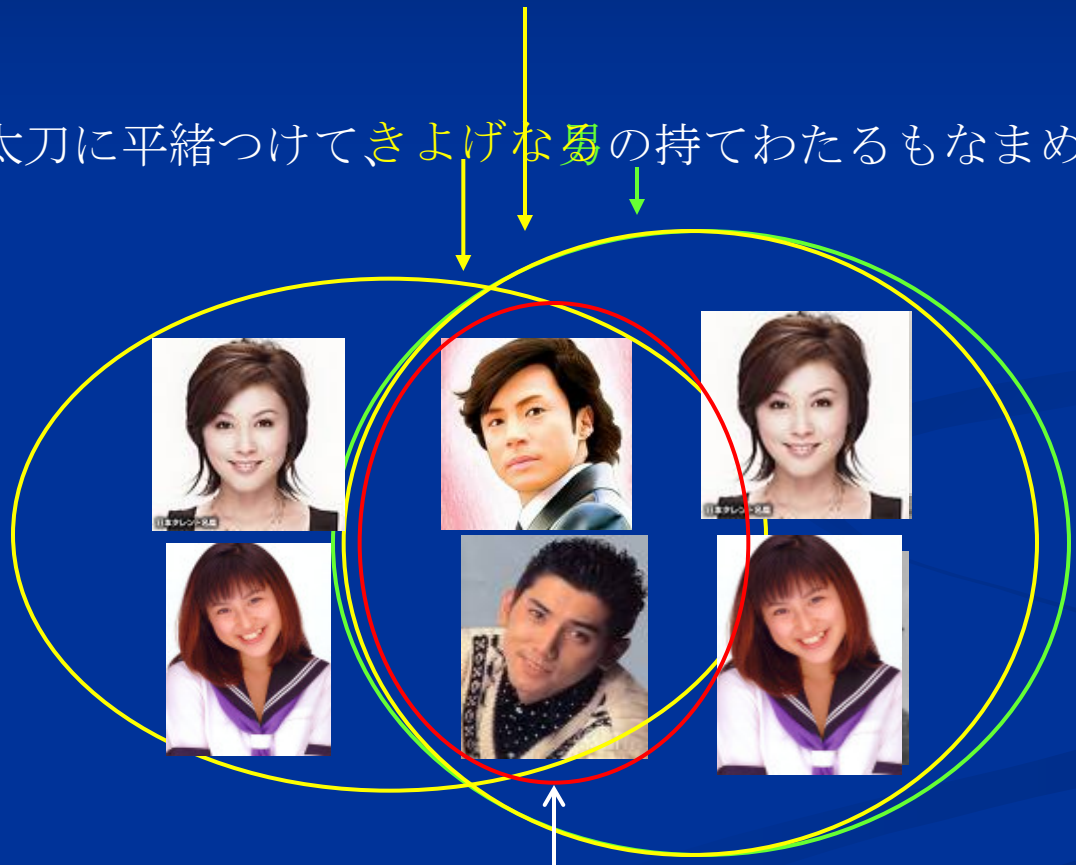
かくのごときものは、これを連体句と称することをうべし。

# 関係節構造、すなわち準体言の連体法・関係節用法(修飾用法)とは？

ある概念を別の概念が下位範疇を指定することにより、主部名詞句の概念の限定という修飾機能を負うもの

男も、女も、わかきよげなるが、いとくろき衣を着たるこそあはれなれ。

細太刀に平緒つけて、きよげな男の持てわたるもなまめかし。



これは、限定修飾で、同定修飾の同格構造でない

「きよげなる男」が指定する概念



# 英語版

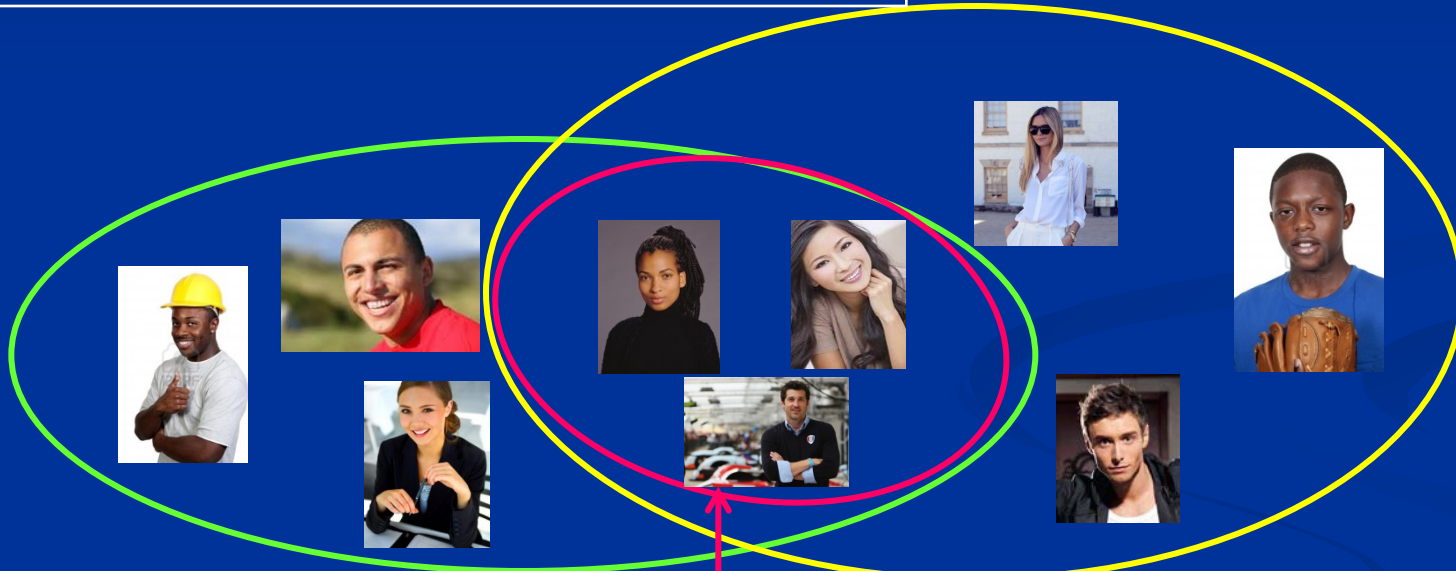
What modification by a nominalization (so-called RC) is all about?

Invite  $[who\ you\ like]_{NMLZ}$

Denotes



A nominalization restricts the denotation of the head noun by its denotation, specifying a subset of the denotation of the head noun.



Denotes



Denotes



Invite the  $[[colleagues]_N [who\ you\ like]_{NMLZ}]_{N'}$

Restrictive modification of this type is defined as an intersection of two nominal entities (「モノ」による「モノ」の下位範疇の指定)

## Formal Semanticsにおける限定修飾の取り扱い

*apples that Hanako bought*

denotes the intersection the two sets of objects specified as

$\{x \mid x \text{ are apples}\}$

~~$\{x \mid \text{Hanako bought } x\}$~~

$\{x \mid x \text{ are what Hanako bought}\}$

いわゆる非制限関係節は、同格構造で、主名詞の指定 (denotation) を同定する機能を担う

事態準体言 (この場合は「場所」をメトニミー的に指定する)  
[私が生まれ育った]のは埼玉—その田舎町にある借家だった。

非制限関係節 [私が生まれ育った]埼玉は「ダサイたま」と言われる。

[私が生まれ育った](場所) = 埼玉